

雑誌『女人芸術』の座談会における 〈新しい女〉の考察

「多方面恋愛座談会」と「異説恋愛座談会」を中心に

Sreedevi REDDY

1 はじめに

昭和初期の“円本ブーム”によって人気作家になった三上於菟吉の援助で、長谷川時雨は、雑誌『女人芸術』の刊行を昭和3年7月（1928年7月）に女人芸術社から再びはじめた^①。時雨は『女人芸術』の発刊の目的として、新人女性作家の発掘と育成、全女性の連携をあげていた。このようにして、昭和3年（1928年）から昭和7年（1932年）6月まで発刊された『女人芸術』は、女性にとって文学界への登竜門として機能した。大正初期、雑誌『青鞥』によって広がり脚光を浴びた〈新しい女〉という言葉が、『女人芸術』によって、再び〈新しい女〉が話題となった。『女人芸術』は、1928年7月から1932年の6月まで合計48冊出版される。長谷川時雨は、講演会や各地に女人連盟の設立等を計画し、全面的に女性の進出を計った。多数の無名作家、林芙美子、中本たか子、円地文子、戸田豊子、大田洋子、矢田津世子、松田解子、辻山春子等が誕生した。雑誌『女人芸術』に「新人紹介」欄があり、そこで、新人が自分で自己紹介を書くのである。附録『女人大衆』の「読者の声」コーナーでは、女工など多くの読者が自分の経験を紙の上で語り合った。それは、投書の形でその声を寄せた女たちの姿を反映するものでもあったろう。それは労働史と女性労働者の声として、当時の状況を正確に把握するためにとっても大事な資料である。

雑誌『女人芸術』の当時の評価は、昭和3年（1928年）12月28日の読売新聞上の婦人欄に掲載された神近の文章からうかがえる。神近は婦人運動の現状とその年の主な出来事を述べながら、『女人芸術』のことに關しても書いている。

第三は「女人芸術」創刊である。「女人芸術」は長谷川時雨女史の経営に関はるものだが、此雑誌は雑誌として何等主義主張を持たないに拘はらず、而も尚婦人運動に良い機会と刺激を与へた、これは特筆大書すべきことであらう、なぜといふと「女人芸術」は無政府主義者をも、共産主義者をも、国家社会主義者をも、ブルジョア婦人をもその総てを網羅した、従つてその誌上で論争される題目は、ブルジョアに対する新興婦人の鋭い叫びであつた、この叫びこの論争こそ本年の婦人運動に大きなシヨックを与へたところのものであつた。

雑誌『女人芸術』は、長谷川時雨によって創刊され、文学界への“女性の進出”を物語っている。これは、女性を抑圧していた社会・政治制度への対抗を示す女性の表現の場だった。したがって、女性文化史の中で政治思想という面からこの雑誌の重要性の検討を行う必要があるだろう。いや、日本の政治思想という面からも、日本のもうひとつ大事な面が、ここに潜んでいる可能性がある。つまり、日本女性運動の重要な一面が、ここに潜んでいるのではないかと思う。

本論文は、長谷川時雨の『女人芸術』が行った「多方面恋愛座談会」と「異説恋愛座談会」を中心に分析し、昭和初期における〈新しい女〉像を析出することを目的とする。雑誌『女人芸術』の恋愛座談会を本格的に研究した先行論文はない^②。日本の近代—明治・大正・昭和戦前期—における「女の愛と性の自由」についての研究としては、江刺昭子のものがあるが、江刺は、愛を通して女性が「家」からの脱出を計ったと、当時の女性の手による文献を用いて語っている^③。また、佐伯順子の『恋愛の起源—明治の愛を読み解く』^④は、タイトル通り、明治小説にみられる恋愛を中心に分析を行っている。したがって、本論の分析は、時雨研究においてはひとつの新しい試みとなる。

2 時代背景と同時代評

昭和3年(1928年)という年は、大恐慌と満州事変を軸に日本が全面的な中国侵略戦争を計画する前の時期にあたる。この年の2月には、最初の総選挙が行われた^⑤。第一次大戦後、日本では各種の産業が発展し、農村労働力は都市に吸引され、都市の人口が増加した。彼等は都市に定着し、家族をもつことになる。しかし、大戦後の恐慌の影響で、その多くの者は解雇されて職を失った。失業した大衆には生計をたてるために職業を選ぶ余裕はない。当時の日本は不況下であって、常用雇用の可能性は殆どなかったから、低賃金でも不安定でも、ともかく職に就いた^⑥。

また、その一方では、バスやタクシーが都市の交通機関として登場し、地方でもバスが次第に普及してゆき、東京では「円タク」「円本」ブームが起こった。都市は、種々のものを誘惑する場所でもありながら、新しい文化や風俗や習慣を生み出すところでもあり、るつぼといっても過言ではない。ラジオ放送が1925年3月に始まり、受信機は大都市に急速に普及した。それから、アメリカの映画やジャズ等が、ファッションの先端を走ったのはこの時期であった。ダンス・ホールが流行し、カフェーという酒場が急激に出現してきた。こうした状況の下で大震災後の日本では、本を読もうとする人々は、買いやすさと読みやすさを求めたにちがいが無い。大衆雑誌が全国に普及したのも、一冊一円の「円本」ブームがおこり、改造社や新潮社などが競い合ったのもこの時代であったからだ。これに対抗するように、岩波文庫や改造文庫が古典をあつめて、都市化と高等教育の普及によって増加した若い読者をひきつけていった^⑦。ちなみに、1920年代にはいるとなんと、高等女学校数は、男子中学校数を上回り、1928年に733校まで伸びる^⑧。

こうした背景の下に登場した『女人芸術』が主催した恋愛座談会に対する同時代の主な批評として、翌年(1929年)の2月号に掲載された平塚らいてうの文章をあげることができよう。平塚らいてうといえば、〈新しい女〉というイメージがあるが、らいてうはどのようなわけか恋愛座談会には参加していない。

また、『女人芸術』以外の多くの雑誌も、読者の関心を惹くために座談会を計画していたことが、らいてうの対話形式をつかった次の文章から窺える。

- A 相変わらずいろんな雑誌がまだ座談会なんてやってますのね、どうせ誰だつてああいふ席で自分の思想を十分言へるものじゃないし結局くだらないと思ひますわ。
- B しかしそれといふものは今の一般読者に一つ思想を徹底的に論じたやうな真面目な長い論文を読み通す根気がなくなつたから、今の読書界の反映なんですね^⑨。

また多くの、特に婦人の座談会は、性に関する様々な問題を扱っていることが、次の箇所から分かる。

- A 婦人の座談会といふと矢つ張り何といつても性の問題が多く扱われてみますのね、そして性の問題を扱つたときが一番活気があつて、話のはづんてるやうじゃありませんか、あなたいつかの「平凡」や「女人芸術」の恋愛座談会の速記をお読みになつて？
- B ええ読みました。(略) 恋愛の自由を叫んだときなどから思ふと今の若い女の性に対する考えへの違つて来た事が目立ちますね、いい意味にも、わるい意味にもねえ。
(中略)
- B いい意味といふのは恋愛や性慾そのものを罪惡視する宗教的偏見や、差別的な性道徳の観念や、性に対する過剰な羞恥などから綺麗に解放されて、ほんとに自由な立場で、恋愛や性問題を考えるやうになつたことで、わるい意味といふのは恋愛の情緒が忘れられて——少なくともその情緒の価値が忘れられて、ひどく貧弱なものになり、枯渇しかけて、恋愛から離れた性慾だけが目立つて表面に出て来たことです^⑩。

このように、らいてうは、座談会について多少批判的ではあったが、雑誌『女人芸術』が主催した他の座談会にはよく参加していた。それはたとえば、昭和4年（1929年）6月の「女人芸術一年間批判会」、昭和7年（1932年）1月の「母として目覚めなければならない時相」等のようなものである。

また、当時の雑誌を一目すれば、恋愛や結婚や、性に関する記事等が多く存在し、そうしたテーマが論じられていることがわかる。さらに、1920年代の『読売新聞』『東京朝日新聞』などに、女性雑誌の広告が掲載されており、結婚や恋愛に関する書物、さらにそうした類の情報の広告がしばしば目につく。

3 問題提起

大正時代、著名人たちの自由恋愛事件が、当時のジャーナリズムを騒がしていた。詩人北原白秋と人妻松下俊子が、1912年7月に、俊子の夫に告訴され、白秋が姦通罪で入獄されたのは有名である。同年8月、早稲田大学の島村抱月は、女優松井須磨子との関係が原因で、恩師坪内逍遙にとがめられ文芸協会を退会させられた。1923年7月、有島武郎は軽井沢の別荘で、『婦人公論』の記者・波多野秋子と心中し死体で発見された。このように、恋愛に関する事件が新聞紙上で注目を集めた。さらに、この時期、有島武郎の『惜みなく愛は奪ふ』（1920年）や倉田百三『愛と認識との出発』（1921年）などが相次いでベストセラーになる^①。その少し前の1916年に、元記者神近市子が、社会主義者の大杉栄を恋愛のトラブルのすえ刺傷した事件もまだ記憶に新しかったはずである。

昭和初期には、女性たちの間で、洋装、断髪、ハイヒールがはやり、「モダン・ガール」という言葉も流行した。恋愛や性に関する記事のタイトルが1920年代にはよく雑誌に載るようになった^②。1927年、コロンタイの『赤い恋』が松尾四郎訳で世界社から出版され、翌年1928年、コロンタイの『恋愛の道』が林房雄の訳で同社から出版された。林は1930年にも、コロンタイの作品『三代の恋』を訳している^③。1928年には大きな二つの恋愛論争が起こったが、それは、

この時代の文人の恋愛への関心の高さをあらわしている。一つは、山川菊栄と高群逸枝の間で行われたものであり、もうひとつはコロンタイ恋愛論争で、主に林房雄と高群逸枝の間で議論される。これに八木秋子がくわわり、論争に一層の拍車がかかる。

『女人芸術』が、恋愛に関する座談会を、しかも、次々と二つも計画したのは、このような時代の期待への応答と反映でもあるにちがいない。これらの恋愛座談会は、女性が行った様々な観点からの、性に関する問題の問い掛けであったと考えられよう。

4 テキストが語る諸恋愛観

1928年の『女人芸術』誌において、9月に「多方面恋愛座談会」¹⁴、そして10月に「異説恋愛座談会」¹⁵が掲載された。どちらも題名の示すとおり、恋愛に関する座談会であった。参加者は全員女性であり、「多方面恋愛座談会」では、嫉妬の感情・感覚、貞操と恋愛、姦通恋愛、恋愛の永久性、三角恋愛・多角恋愛、性欲と恋愛が話題となり、「異説恋愛座談会」でも同じ内容が続けられた。

具体的にいえば、恋愛の社会的価値の有無、恋愛は私事でありながら、その私事が結局国家の基本である家庭構築に関連していくこと、エレンケイの『恋愛と道徳』で述べられた思想の普及、恋愛の前提は経済的な独立であること的主張、コロンタイの『恋愛の道』と『三代の恋』の影響、恋愛至上主義論、避妊技術の進歩、貞操の解放、女は人として生きることによって貞操概念が薄れてゆくという議論、自由恋愛のあらわれのモダン・ガールは既存概念の抵抗であるという議論、昔の日本で恋愛つまり色恋は否定されなかったという認識等が主な論点であった。それらの主張の背後には、エレンケイの『恋愛と結婚』で論じられていた「恋愛結婚」概念が普及していたこと、また、コロンタイの恋愛理論、恋愛至上主義、さらには仏教思想を基盤にした恋愛思想などもあった。

「多方面恋愛座談会」と「異説恋愛座談会」の双方の座談会で共通の話題と

なったことは、恋愛の永久性という問題であった。社会主義を強烈に主張する神近市子もいれば、思想的偏向を持っていない時雨もいる。また、アナーキストの八木秋子、望月百合子もいれば、社会主義に共感を感じている平林たい子、林芙美子もいる。そこでは、それに関する三角関係・多方面恋愛関係、姦通罪、貞操、性欲と恋愛の関係などが熱狂的に論じられた。ここでは、恋愛座談会に参加した、神近市子・生田花世・長谷川時雨・八木秋子・伊福部敬子・望月百合子の6名の発言を分析し、彼女たちの考える〈新しい女〉像を追求することを目的とする。

(i) 神近市子の恋愛論

彼女の考えは、以下の5点にまとめることができる。

1. 私みたいに家庭があり子供があり仕事があると云ふやうになると、さういふ恋愛の成行に就ては、非常に恋愛當初のやうな情熱を以て努力してはゐられない、さう云ふ場合には私は、非常に薄くなります、或時は無にもなります。¹⁶⁾

恋愛という感情は、他の責任・仕事に忙しくなったら、時間がなくなり、薄くなっていくと述べる。

2. 結婚になり、子供が生まれるとなると、それは決してプライベートだけのものではないと思ひます。¹⁷⁾

当時、彼女はすでに、ロシアでは恋愛は個人的なものだと見なされていたことを理解していたと考えられる発言である。そして彼女は別のところで、次のように述べている。

今ロシアでは、恋愛関係は凡て個人的の事として一般には不問に附される方針が行われてゐるやうです。¹⁸

しかし、恋愛は個人的としても、子供が生まれたら社会に関わりがあるようになってくるといふ主張は、当然ながら、自分の経験を反映したものと考えられよう。また、恋愛は個人のものだとしても、結果は社会に関わるものだと、座談会の終局にも主張していた。

3. 女の方だつて倦きますよう。併しほかの経済的に獨立出來ないと云ふやうな事情や何があるだけに、強くそれを表現しないと云ふだけで、¹⁹

4. 戀愛そのものの本質は個人的ですが、行爲に移つた時には社會的のものになるのではないでせうか。²⁰

ここでは、〈自己〉を表現するために、経済的な自立がなによりも重要だと語っている。彼女のこの考え方は、様々なところにも現れている。神近のこの考えを証する次のくだりを引用する。

『赤い戀』は餘りに現實的である結果か空想が貧しく戀愛の様式についても寧ろ餘りに舊套的であると思ひます。私共が當來の社會の最も健康な婦人として考へてゐる婦人はコロンタイが描いたワシリツサに外ならないと思ひます。理智に明るくして情熱に強く、人間の生活に健康な批評を持ち友愛に富む労働を厭はぬ婦人こそ、私共が理想とする社會の婦人ですが、しかし戀愛に對してのみは、彼女は餘りに傳統的であり且つ人道主義的であつたと思ひます。私共は、戀愛のこの方面に於いては、寧ろワシリツサの友達のリサに共鳴を覺へます。²¹

さらに、神近が、恋愛というのはいかに女性を利用し、苦悩させているかと考えていたことが、下記の箇所から推測できる。

5. 矢張り恋愛勝利者の方が非常に正しいとお考へになりますか、子供を扶養して居る馬鹿な奥さんの方がお氣の毒だと思はれますか、社会的には何方を助けなければならぬとお考へになりますか、私は今恋愛至上論に反対的な意見を段々持ちつつあるのは其點です。²²⁾

実際に、上は『近代戀愛觀』を書いた厨川白村氏から勇敢な自然主義的戀愛の使徒徳田秋声、武者小路實篤氏から、今はこのアナーキストウラジミルに至るまで、一列同列に恋愛至上主義であることを私は意外に思ひます。彼等は政治について文藝について宗教については、自分自分の異なる立場をもってゐます。そしてそれを意識してゐます。しかるに戀愛についてのみは、彼等は一様に恋愛至上主義の主張者であり實行者であるのです。何故でせう。

それは、彼等は一上は厨川白村からいまはアナーキストのウラヂミルに至るまで一性的支配者である一男であるといふ點で共通した立場を持つてゐるからだと思ひます。支配的立場にある者にとつては、ロマンチズムは何時も大切なかくれ簀でありました。今戀愛の支配的地位で、男子が何時までもこのかくれ簀を大切に保護しようとするのは當然です。彼れにとつてはそれは彼等の誇りと戀愛の飽くなき愉樂を、保證してゐるものであるのです。²³⁾

神近がこの年に翻訳した「革命と恋愛」には、この発言のもととなつたと思われる思想が見出せる。

そして何事でもブルジョア風に反対なことをよくすればするほど、その人

の革命的精神は大きいとされた。この事は、日常行爲の上に適用されたばかりではなく、又戀愛の上にも適用された。

(中略)

そして粗雑な言葉と『無骨』とを嫌つた若い娘達は、まだブルジョア風の偏見を捨て切らないものとして批難された。コロンタイは一積極的な形ではないが、『三代の戀』と題するその短篇の中で、この態度を辯護してゐる²⁴。

神近は、コロンタイの『恋愛の道』が、日本の若者の間でかなり話題になっていることに関心を示している。母への福祉保障がなければならない、女性のことを国家は保障しなくてはならないと主張している。これは、社会主義の思想に基づく神近の恋愛論であろう。また、恋愛をする余裕は有産階級のもので、労働者にはそんなことを考えている暇はないことを主張し、それだけでなく、自由恋愛には反対であるという意見も述べている。恋愛は個人的なものであったとしても、結果は社会に関わるものでもあるので、責任の認識を要求し、恋愛関係には女性の負担が増えるのであり、それに対して、どんな保障もないという論理によって、恋愛至上論に反対の姿勢を展開している。このころ彼女は、すでに子供の母親であった。前に有名な恋愛関係の事件を起こした経験もあり、自分の経験の反映として見ることができよう。

神近は男性の貞操を問題にし、一夫一婦制度でなければならない、それは性的に女性は受動的な立場に置かれているからであるという。これは彼女の論文「男子の貞操物語」の内容と同じものであった。そこで彼女は、「男子の貞操を問題とする場合、それは必ず一夫一婦の夫婦様式を擁立保護しようとする意志でなくてはなりません²⁵」とも、「男子に貞操を求むる時、実際の問題として私共が考えなくてはならないことは、性的には私共婦人は概して受動的に立場にあるといふことです²⁶」とも述べている。

(ii) 生田花世の恋愛論

生田花世は、日本家族制度と社会制度の矛盾について述べている。生田によれば、恋愛というものは、様々な要因によって築かれ、人の環境、職業、精神状態などによるものであるという。恋愛の永久性は望ましいが、現実としては存在しないともいう。恋愛は形を変えれば、永久性があると主張している。生田は恋愛と色事という二つがあるという。さらに、男でも女でも、恋愛をするのは積極的に生活力を持っている人で、そうでない人は恋愛をする力を持っていないと論じてもいる。

1. けれども何うしても今の様な社会状態で、若い人は、一方に妻君が有らうが無からうが、兎に角觸れるところまで觸れて、自分を生かしてみようと云ふ氣持ちは、随分強いだらうと思ふ。²⁷

このように彼女は、三角・多角関係などを問題にしない若者にとまどいを覚えている。彼女の夫であった生田春月が、女性問題を多数おこしていた人物であった。このような背景は彼女が、この時点で、自由恋愛に反対の姿勢をとっている原因となっていると思える。しかし、数ヶ月前に書いた「自由恋愛批判」では、先述の考えに矛盾するような意見を述べている。

こんな風取扱つて見ると自由戀愛について、一圖な非議の持主でない私の心が出たやうである。いはば戀の罪だけは他の何の罪よりもゆるしいやうな氣が私にはある。人間の悲しい宿業、それが戀と罪である。(中略)それで女性の結婚の失敗、戀愛の失敗がより多い。どうか女性の生存の幸福のためにと思ふ。賢い強い正しいやさしい男性でこの世の中がみたされるやうに……………²⁸

しかし、昭和3年(1928年)10月の『女人芸術』誌上に掲載された文章から

は、彼女の考えに変化のあったことがわかる。自由恋愛には三つの形式があり、それは一夫多婦、一婦多夫、一夫一婦である。この中で一番納得いくのは、一夫一婦であると生田は考えている。生田はここで三角関係恋愛などについて書き、下記のように述べるのである。

一夫多妻、一婦多夫、一夫一婦、この三種の形式の中で、私達のような女性のもつとも願わしいものは一夫一婦である。さうでなければ一人生きる事である。今進んであるといふ新しい人々は夫に戀人のあることを、昔のやうにはモンダイにしない。人間の心は變るのだからそれがよいはずだといふ。(中略) 所謂『戀愛共産』そんなことはもつとも私の性に合わない。性に合わないことをするのはうそであるからいやなことである²⁹。

三角関係を否定している。生田にとっては性欲を含まない恋愛、自由恋愛は許される恋であり、男女の社交的なことである。

2. 戀愛つて云ふものは、(略) 遊戯的な戀愛でなければ…女の人は戀愛から出發して家庭を作つて行く。年月が経てば経つ程深く…その中に入り込んで行きますが、男は築いて行けば行くほど醒めていく…と云ふことが言へると思ひます³⁰。

次のように生田は、男性に貞操をもとめること自体が無理であると、発言している。

瓢箪から駒のとびだすやうなことが見せて貰へる。それが男の性情である。この性情が男性の自己發揮の源になつてゐる。かういふグロテスクな男性そのものに対して公明なる貞操を求めるのは丁度炎天に慈雨をのぞむやうなたぐいののぞみ事である³¹。

これの外に、妻としての男性の貞操保護は一寸今のところ私にはみつからない。⁴²

生田花世は、1910年代に「貞操論争」⁴³という論争を巻き起こしている。

生田は、独身時代、貧困から貞操を売り、金を得ていた。「貞操論」では、自分の経験を語り、社会が女性に対して財産と職業を与えない限り、女性は貞操を捨てるを得ないと主張している。が、貞操を捨てることによって「幸福な結婚」をすることができなくなるということも言っている。確かに矛盾しているが、これは、当時の社会の現実を物語っている。女性の経済的独立を困難にするような制度が存在する限り、家父長制の要素である、自由恋愛も、貞操も、三角関係も、また新たな従属を生む原因になるだけであると、生田には、わかっていた。

貞操という問題は、最終的に結婚の問題と結びつく。良き家庭の象徴として「貞操」が存在とし、それはいうまでもなく、家父長制を支えるための機能に過ぎない。これに対して、生田は次のような「近代的自由恋愛」についての考えをもっていた。

彼等は文明人として、自由人として、その言葉で、手で、上品に、デリケートに愛撫し合ひ、理解しあひ、ドライブし、そしてその指にはからず唇の相觸れることもあるのであらうけれどそれ以上にすすむということはまづないといつてもよいやうなかうした近代的自由戀愛については私はまだごくわづかしその例を知らない。中略。かういふ人達の戀愛は文化人的であるから、その当事者たちで十中十まで綺麗に解決するであらう。だから、世の中の表面へはあまり露はれない。ただ彼等と彼女たちとは親しい間の交際人であるとしか見えない。かういふ自由戀愛者たちはよくその自制をしつてゐる。なぜなら、それでなければ野蠻人の戀愛になるおそれが

あらうといふもの。³⁴

生田花世の外見は美しくなかったと、望月百合子は語っている。望月によると生田は、夫春月が他の女性と口を聞くことすら許さなかったらしい。³⁵

(iii) 長谷川時雨の恋愛論

昔風の教養と伝統的雰囲気漂う下町日本橋育ちの49歳の時雨の発言は、仏教の影響を反映しているように思える。また、哲学的でもある彼女の思想を読みとることができよう。時雨は、寺子屋式の小学校で読み書きを習い、算盤、舞踊、生け花、茶道という稽古を身に付けた。「女に学問はいらない」と読書が禁じられていた少女時代をすごした。

1. 私は天地が一際恋愛と云ふ気持ちとする。總てのものに恋愛があると思ふ、男女の間ばかりではないと思ひます。³⁶

2. 生きてゐるものには何にでも恋愛がある。さうすると、何て言つたら宜いか……。男女の恋愛と云ふのが、非常なパツション—その時の何か一番ねん焼した刹那がはなで、さう持続するものぢやない。³⁷

しかし、時雨の名前は「多方面恋愛座談会」の出席者リストにはあるが、「異説恋愛座談会」にはない。しかし、「異説恋愛座談会」にも参加している。ここでも、彼女の恋愛の哲学を読みとることができる。

3. その人の才能、その人の遣る事、それ等に敬意を持つことが澤山ありますね、それと恋愛とは違ひます。恋愛は無条件なものです。(略) 私なんぞ時代が違うからでせうけれど、手を與へると云ふ時には、既に心も與へると同じやうな氣持なんです、今ぢやまるで違ひますね。³⁸

精神的な面を肯定的に考えている。時雨は、水橋信蔵と政略結婚をするが、協議離婚にいたる。そのことについては、『渡りきらぬ橋』にある。それに加えて、彼女は、中谷徳太郎との恋愛関係について、同じく『渡りきらぬ橋』の中でそれとなく触れている。

あたしの山に居ることを聞いて、作品から慕ってくれている少年があつたから、あたしは、心にもなき家に止まつて、その少年の恋愛を告げる心を掴んでいるのは、両方に対して心苦しく感じていたからでもあつた。

これは、中谷との恋愛関係の最初のころについてである、と岩橋は指摘している。²⁹ 中谷徳太郎は、時雨より6歳年下であった。彼とともに演劇研究誌『シバキ』（大正2年（1913年）2月～7月）を編むのであるが、二人の間に生じた意見の違いで、5号で終わりを告げる。無名の青年三上於菟吉と知り合い、彼のラブレター攻撃にまけ、12歳年上の時雨が関係を結ぶことになる。40歳の時雨が、28歳の三上於菟吉と内縁関係を結ぶというかたちで世帯を持つのは、大正8年（1920年）ごろのことである。さらに、この三上も、女性関係が多数あった。こういう時雨だが、彼女は伝統的な価値観にしがみつながら、女性の進歩を願い努力したひとでもあった。

(iv) 八木秋子の恋愛論

八木秋子は「異説恋愛座談会」のみ参加している。当時、八木秋子は33歳で結婚経験があり、自らを性の対象としか考えていなかった夫に失望し、数回家を出をし、そして離婚していた。東京日日新聞社をストライキ参加が原因で首になったが、記者の経験を生かして『女人芸術』の編集に関わった。のちに、同誌上でアナ・ボル論争を1929年に起した。

1. 私、戀愛は性慾と友情とによつて戀愛と名付けられるものぢやないかと思ふ。⁴⁰

2. 私は戀愛といふものが、あまりに高貴な地位におかれてゐると思ふの。さうした概念を打ち破らねばならない。(略)。今後の社會では戀愛といふ誤つた概念を打ち破りたいと思ひます。⁴¹

前述のように、1928年に起こつた戀愛論争「コロタイ論争」、あるいは「三代の恋」で、アナキスト八木秋子は、「戀愛と自由社會」⁴²において、「戀愛は性欲と友情で食欲と同じ本能だから要求に従つて満足のために行動することは人間に許された自由でなければならず」と主張した。さらに八木は、「戀愛愛は高い美しいと思つて随分悩んだことがあつたが、現在は、それは考えたら大変馬鹿馬鹿しい」と同座談會に発言している。興味深いのは、八木が、戀愛は簡単に言葉では表現できないものであると述べている点である。

(v) 伊福部敬子の戀愛論

1. 戀愛といふものは、やはり性慾本能から出發して、單なる性慾だけではなく、そこから發達した感情である。で、そこには肉體面もあり、精神面もある。⁴³

2. そりや個々の問題ですよ。然し、やはり戀愛は戀愛でせう。林さんのおつしやるやうな肉體面を持たなかつた戀愛は、本当の戀愛ではなく、過去に對するなつかしみ、所謂心残りでせう。(略)。ですからはつきりと、肉體面と、精神面と分ける譯には行かないと思ひます。⁴⁴

伊福部は、「異説戀愛座談會」で、前回(多方面戀愛座談會)は戀愛の定義なしで進んだために、プラトニック・ラブ、母性愛、戀愛の定義が混乱したら

しいという。伊福部は恋愛というものは、性欲本能から出発して、単なる性欲だけでなく、そこから発達した感情であると定義づけている。精神面のことをプラトニック・ラブと称するのであり、肉体面に入ると「夫婦愛」というようにいわれて来たのであるという。一般には、精神面の愛は、非常に高いものと思われてきているが、それは明治以来の女子教育の誤謬だと「異説恋愛座談会」で述べている。私有財産制度がなくなったら、今のように男に服従することがなくなり、不貞、姦通という概念もなくなると主張している。

女の活動範囲は限られている。社会の中で果たす役割も制限されている。伊福部は、〈自己〉の活力を示すために制限があると主張し、それがなくならない限り、自由な恋愛の実現は可能ではないと述べている。彼女の場合、肉体面の愛がなければ愛ではないということまで、〈新しい女〉は行き着いている。

(vi) 望月百合子の恋愛論

望月百合子は、明治生まれで、成城女子学校を卒業したのちフランスのソルボンヌ大学に留学した経験の持ち主であった。記者としても働いたことがある。

1. すると、恋愛と云ふものも重要なものでせうけれども、私共の生活には道徳が非常に重要です。道徳と恋愛と一致させて行かなくちやなりません、戀人と逃げたら恋愛至上主義には適ひませうが、七人八人の子供と妻君を棄てると云ふことは、事實どんな意味に於いても道徳に適はない。⁴⁵⁾

自由を持ち、責任を十分認知しながら、人間としての社会に対する責任を十分に感じて道徳を考える必要があると述べている。望月は、次の「婦人解放の道」の中で、男女関係は社会の変化によって変わるものだが、つまり、「今日の強権的政治組織が存在する限りは、愛と道徳とに依って存在の意義を認められたる婦人の地位は、依然として服従関係におかねればなりませんまい⁴⁶⁾」述べている。

2. 言葉は換へて事實は存在するでせうと思ふ、新しい時代が來てもさう云ふことはあると思ひます、ですから生活意識から変わつて行けば宜いと思ひます。所有權を無くせば事實はあつてもいい。先づ所有權と云ふものを、無くさねばならないと思ひます。^⑭

さらに、自由社会は愛を真面目に、真剣に考えさせるのであり、そこでは同時に二人を愛することもできると新社会に希望を抱いている。彼女は、婦人参政權の獲得だけにとどまらず、社会全体の解放を主張したのだった。たとえば、次の望月の「婦人解放の道」には、そのような考えが読みとれ、それは当時の社会で活動していた女性の生の声を反映していた。

たとへ婦人が参政權を得、或は、官吏に就職する權利を得、またその他職業上に於ける男子と平等の權利を得たとしても、それには法律上の平等權に過ぎず、文字の上の平等權に過ぎず、或は極めて特殊な婦人にのみ適用される權能に過ぎないでありませう。そして一般婦人は依然として哀れむべき奴隷の境涯に苦しみを忍ばなければなりません。

單なる婦人参政權の獲得、單なる職業上の平等權等は、些か婦人の意氣を高め、婦人の自覺を促す助けにはなるでありませう。それ故これを全然無益な運動だとは申せません。が併し、かうして權能の獲得に依つて、從來、同情同感の同性的共同戦線に立つて來た婦人同志の間に、新たに階級的差別が生じてまゐります。即ち今日の社會に於けるブルジョア階級と、プロレタリア階級との差別と同じ差別が、新らたに婦人同志の間に起つてくるのであります。^⑮

上の意見は先に述べた点を証明している。望月百合子は、婦人の参政權の獲得を通して、婦人の解放だけにとどまらず、全人類の解放がなければ、存在し

ている状況がいくら法律などで規制されても、変化がないと主張している。

5 結論 『女人芸術』の座談会における〈新しい女〉像

この座談会からうかがえる〈新しい女〉の主張と探求には、いわゆる「性の二重規範」の問題が現れている。三角関係・多方面恋愛関係の提案も、性の二重規範への抵抗ではないか。女性は、家父長制イデオロギーからの解放を計り、それは「家」からの脱出、そして、なによりもそのシステムの基盤の「性」からの解放を考えなければ解放はない、と彼女たちは切実に感じていたのではないか。皮肉にも、その性の解放というものは、男性イデオロギー、つまり家父長制度の要素を使用しながら語られたというパラドクスがあった。なにより、「性」の解放を計ったこと自体は、女性運動・女性にとって大きな一歩であったに違いない。

彼女たちにとって〈自己〉ということは、国家に支配されない〈自己〉、己を支配するものは己である、ということに他ならなかった。

〔注〕

- ①1923年、長谷川時雨と岡田八千代によって、前期と言われる『女人芸術』同人誌として元泉社内女人芸術社から発刊されていたとされる。8月号と9月号が出たが次の号は関東大震災のために終わる。8月号と9月号のすべての文章は長谷川時雨と岡田八千代によるものである。この点は尾形明子『『女人芸術の世界』(21～24頁)による。
- ②尾形明子は『女人芸術の世界』と『女人芸術の人々』という二冊に少しは触れている。
- ③江刺昭子『愛と性の自由—「家」からの解放』(社会評論社、1989年)。
- ④佐伯順子『恋愛の起源—明治の愛を読み解く』(日本経済新聞社、2000年)。
- ⑤中村隆英『昭和史Ⅰ』(東洋経済新報社、1993年、148頁)。
- ⑥中村隆英『昭和史Ⅰ』(東洋経済新報社、1993年、150頁)。また、江見康一編『長期経済統計—4 資本形成』(東洋経済新報社、1971年)を参照。
- ⑦中村隆英『昭和史Ⅰ』(東洋経済新報社、1993年、114—120頁)。
- ⑧唐澤富太郎『女子学生の歴史』(木耳社、1979年)。
- ⑨平塚らいてう「或る日の対話」『女人芸術』昭和4年2月(1929年)、52頁。
- ⑩平塚らいてう「或る日の対話」『女人芸術』昭和4年2月(1929年)、52頁。
- ⑪この段落は主に江刺昭子『愛と性の自由—「家」からの解放』(社会評論社、1989年)と近代文学大事典(日本近代文学館、昭和52年)を参照にした。
- ⑫『読売新聞』『東京朝日新聞』、雑誌『女性』『婦女界』『主婦之友』等の1925年～1928年の分を参考

にした意見である。

- ⑬国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（風間書房、1959年）。
- ⑭「多方面恋愛座談会」『女人芸術』昭和3年9月（1928年）、2～22頁。参加者の数は14人で、今井邦子、生田花世、長谷川時雨、長谷川春子、新妻伊都子、大井さち子、神近市子、ささきふさ、境真柄、北川千代、城しづか、平林たい子、望月百合子、素川絹子である。
- ⑮「異説恋愛座談会」『女人芸術』昭和3年10月（1928年）、78～88頁。メンバーは、9人で、伊福部敬子、生田花世、林美美子、長谷川春子、永嶋暢子、八木秋子、北村兼子、城しづかである。（実際に長谷川時雨も参加している）。
- ⑯「多方面恋愛座談会」『女人芸術』昭和3年9月（1928年）、3頁。
- ⑰「多方面恋愛座談会」『女人芸術』昭和3年9月（1928年）、3頁。
- ⑱神近市子著「新しき恋愛の理論について—コロンタイの「赤い恋」をよむ—」『女性』昭和3年3月（1928年）。
- ⑲「多方面恋愛座談会」同上、10頁。
- ⑳「多方面恋愛座談会」同上、20頁。
- ㉑神近市子「新しき恋愛の理論について—コロンタイの「赤い恋」をよむ—」『女性』昭和3年3月（1928年）、30頁。
- ㉒「多方面恋愛座談会」同上、18頁。
- ㉓神近市子「新しき恋愛の理論について—コロンタイの「赤い恋」をよむ—」『女性』昭和3年3月（1928年）32頁。
- ㉔神近市子訳（セシカ・スミス著）「革命と恋愛」『女人芸術』昭和3年8月（1928年）13頁。
- ㉕【男子の貞操物語】『女性』昭和2年9月（1927年）①神近市子「ごく一般の場合を考へて」、108頁。
- ㉖【男子の貞操物語】『女性』昭和2年9月（1927年）①神近市子「ごく一般の場合を考へて」、109頁。
- ㉗「多方面恋愛座談会」同上、12頁。
- ㉘【自由戀愛批判】『女性』昭和2年7月（1927年）④生田花世「自由戀愛の三の相について」、104頁。
- ㉙生田花世「所謂恋愛共産婦人—三角関係の一端より—」『女人芸術』、昭和3年10月（1928年）、69頁。
- ㉚「異説恋愛座談会」『女人芸術』昭和3年10月（1928年）、87頁。
- ㉛【男子の貞操物語】『女性』昭和2年9月（1927年）④生田花世「男子の貞操の源となるもの」、117頁。
- ㉜【男子の貞操物語】『女性』昭和2年9月（1927年）④生田花世「男子の貞操の源となるもの」、119頁。
- ㉝生田花世著「食べるために貞操」、「反響」、1914年9月。
- ㉞「自由戀愛批判」、「女性」、昭和2年7月④生田花世「自由戀愛の三の相について」、103頁。
- ㉟尾形明子「望月百合子」『女人芸術の人々』（ドメス出版、1981年、27頁）。
- ㊱「多方面恋愛座談会」同上、5頁。
- ㊲「多方面恋愛座談会」同上、5頁。
- ㊳「異説恋愛座談会」『女人芸術』、昭和3年10月（1928年）、81頁。
- ㊴岩橋邦枝「評伝—長谷川時雨」筑摩書房、1993年、63頁。

- ④⑩「異説恋愛座談会」同上、78頁。
- ④⑪「異説恋愛座談会」同上、78頁。
- ④⑫八木秋子「恋愛と自由社会」『自由連合新聞』復刻版、昭和3年11月1日（1928年）。
- ④⑬「異説恋愛座談会」同上、78頁。
- ④⑭「異説恋愛座談会」同上、79頁。
- ④⑮「多方面恋愛座談会」同上、19頁。
- ④⑯望月百合子「婦人解放の道」『女人芸術』、昭和3年7月（1928年）、9頁。
- ④⑰「多方面恋愛座談会」同上、16頁。
- ④⑱望月百合子「婦人解放の道」『女人芸術』、昭和3年7月（1928年）、9頁。

* 討議要旨

堀川貴司氏は、『女人芸術』とはどのような性格の雑誌だったのか、と尋ね、発表者は、主宰者の長谷川時雨に特定の主義はなく、文芸誌として始まったが、が、雑誌自体が女性の社会進出を目的としており、そのような主張をする人が多くは左翼系で、30年代にはまるでプロレタリア誌のようになっていた、と答えた。

狩野啓子氏は、このようなテーマについては、土井淑平『尾崎翠と花田清輝』（北斗出版、2002）といった研究があるし、論文もあるはずなので、もう少し広い目配りが必要である、と指摘した。

ロバート・キャンベル氏（座長）は、「道徳」が次第にクローズアップされてくるが、これは自由恋愛論の後退なのか、それとも新しい理念（倫理）なのか、と尋ね、発表者は、様々な立場が混在している、と答えた。